令和３年度第１回社会教育委員会議録

■日　時　令和３年８月２日（月）
　　午前１０時から正午まで
■場　所　徳島県庁１０階　大会議室　（一部 Web 会議）
■出席者　徳島県社会教育委員：１４名
　　馬場委員長，安芸委員，泉　委員，太田委員，加藤委員，喜島委員，
　　児嶋委員，佐藤委員，多喜川委員，内藤委員，中坂委員，野中委員，
　　濱田委員，横田委員　　事務局：１０名
　　教育次長，生涯学習課長，生涯学習支援課長，他７名
■会議概要
　１　開　会
　２　徳島県教育委員会挨拶（教育次長）
　３　委員自己紹介
　４　議事（１）今期社会教育委員会議の提言テーマについて
　　（２）今後のスケジュールについて
　　（３）その他

議事（１）今期社会教育委員会議の提言テーマについて

馬場委員長　今回は第１回の会議であるので、委員の方々が日頃から生涯学習・社会教育についてお考えになっておられることや取組について伺いたい。各委員の御意見の中から、次の提言のテーマを考えるにあたってのヒントが得られればと思う。では、安芸委員からお願いしたい。

安芸委員　徳島県国公立幼稚園・こども園 PTA 連合会で会長として活動しており、地域と学校が連携し子供たちの育ちを支援できるよう取り組んでいる。なにぶん初めての委員就任であるので、社会教育推進に関する意見を提案できるか不安であるが、世界を含め社会の現状を見るに、新型コロナウイルスの影響を受け、人と人が接する機会が非常に少なくなっている。このような中で、社会教育で取り上げられている「地域とのつながり」を、どのように作っていくのかをこれまで以上に多様な視点から追求していかなければならない。With コロナと言われるが、コロナの有る生活を前提としつつ「つながりづくり」について協議できればと思っている。昔に比べ、「家庭教育・学校教育・社会教育」このいずれの教育の中からも「地域とのつながり」といった機会が非常に少なくなっていると PTA 活動などの経験から強く感じている。この部分に重点を置いて取り組みたいと考えている。

馬場委員長　PTA 関係者・家庭教育に関わる立場からの御意見をいただいた。今般のようなコロナ禍において地域とがっちりとつながりを結ぶのは難しい状況ではあるが、PTA の方々は地域住民でもあるので、学校と地域のつながり構築に取り組んでいただきたい。様々な手法が考えられると思うが、例えば ICT を活用しながら適時、新たな手法を取り入れ進めていくことが必要。
　では、続いて泉委員に意見をお願いしたい。

泉委員　私の所属する NPO 法人　チルドリン徳島は、「子育て中の母親が、子育てに関する悩みや喜びを共有しつつチームで働く」ことを目的に「ICT ママ」という取組をスタートさせるにあたり 2014 年に設立した団体である。子育てに関する悩みや不安を抱える親が増加している現状から「家庭教育」の重要性を改めて実感している。

私たちは、現在テレワークも含め多様な働き方の推進にも取り組んでいる。母親に限らず、働きたい意欲を持つ全ての方がいろいろな働き方を選べる社会の構築を目指し活動している。コロナ禍では ICT を活用することで、やりたいことを幅広く選択し、遅滞なく実践できると実感している。

生涯学習の場面や家庭教育・社会教育においても ICT を活用することで、新たな取組にも繋げていけると思っている。

馬場委員長　次の時代の方向性を考える上で示唆に富んだ意見をいただいた。ICT を活用した相談事業のようなことはやっておられるのか。

泉委員　ICT を活用した相談事業に特化した取組は行っていないが、働き方の相談を Web で受けることも有り、適時活用するよう努めている。

馬場委員長　次期テーマ設定に向け、委員の知見に基づく知恵をいただきたいと思う。

では、続いて太田委員に意見をお願いしたい。

太田委員　私は今、障がいの有る子供に対する支援を行っている。企業のきっかけは、自身の息子に障がいが有り、保育園に入所できなかったという経験にある。障がいの有る子供や病気の子供を長時間保育等で預かれる環境を整えたいと思っている。現在は、来年４月に徳島では初となる障がい児専門の保育園創設に向けて準備している。まずは、自分からという思いで保育園創設に取り組んでいるが、将来的にはどの保育園においても障がいや病気に関わらず、等しく受け入れられるような環境を整備していきたい。障がい児・者（当事者）が生きやすい社会は、全ての人にとって生きやすい社会であると思うので、このような社会の実現をめざしている。また、前年度の「家庭教育のつどい」において講演をさせていただいた。その折、障がい児・者（当事者）に対する起業支援についても、お話させていただいた。私自身の考えとして、障がいが有る方、発達特性の有る方こそ起業をして、その能力を生かす選択をする方が望ましいと考えている。起業支援を行うことで、御本人自身が生き生きと輝けることはもちろんだが、自立できる環境が整うことで社会保障費等の削減、税収増加にもつながると考える。社会教育委員の皆様から様々な知見をいただき、このような活動を拡充させていきたい。

馬場委員長　この３月に教育委員会に提出した提言の内容にマッチした活動をされている。ダイバーシティ徳島を実現していこうと中核的役割を果たしてこられた。今後、具体の内容等をお聞かせいただきたい。

では、続いて加藤委員に意見をお願いしたい。

加藤委員　去年の８月に徳島に異動して参り、１年ほどが経過した。徳島は暮らしてみて、初めてその魅力が分かる県だ。暮らさないとその魅力が伝わりにくいだろうということを実感している。特に、食・暮らし方・身近な自然、こういったものが徳島の魅力だと思う。

私は転勤族なのだが、今後、徳島を離れてからも「週末は徳島暮らし」のようなことを実践してみたいと思うくらい、徳島に魅力を感じている。

一番の問題は、徳島で育った人が「徳島には何も無い」と平気で言ってしまうところ。思うに、「一度、徳島の外に出てみる」という経験をした人が少ないからではないだろうか。だからこそ、若い人たちには、どんどん徳島の外に出て行くということを薦めていきたい。

社会は効率化の追求で見落とされているものが随分とあると思うが、徳島には良さ、本質の部分が残っていると思う。今、小松島市出身の大杉漣さんの御子息、大杉隼平さんに徳島の魅力を撮影してもらい、それをシリーズで放映している。放送を通じても徳島の魅力を多くの方々に伝えていきたいと思っている。

馬場委員長　「徳島の良さ」を是非アピールしていきたい。教育に携わる人は自分から発信していくことが苦手な部分があるので、専門家の立場からどのようにアピールすべきか御示唆をいただきたい。

では、続いて喜島委員に意見をお願いしたい。

喜島委員　徳島県婦人団体連合会では、今年度「持続可能な地域づくり」の推進に向け一万人を対象とした意識調査を実施している。11 月に実施される婦人問題研究発表会で活動の報告をする予定である。また、８月５日には阿波市部が中心になって「戦争体験を語る会」を開催予定。戦争の悲惨さを次代へ伝えていけるよう取り組んでいる。

馬場委員長　多様なバックボーンをお持ちの方々に委員として御参加いただいている。徳島を元気にするための取組を充実させていただきたい。

では、続いて児嶋委員に意見をお願いしたい。

児嶋委員　私と社会教育との関わりというと、大学でボランティアの担当をしていることと、保育科であるので家庭教育との関連ということになるだろう。社会教育の推進にあたっては、福祉との連携が今後非常に重要になってくるのだと思っている。家庭教育では頻繁に「早寝・早起き・朝ごはん」というスローガンが示されるが、それ以前の問題を抱える家庭が沢山ある。経済的支援や保護者のメンタル的ケアを行わないと家庭教育どころではない状況がある。

また、ネットワーク行政の実質化という点についても、やはり、行政が動かなければ実現しないことも沢山あると思う。今、社会のテーマとして「連携・ネットワーク・つながり・絆」という言葉が使われるが、情緒的な感じに流れていないだろうか。大切であることは間違いないが、行政のサポートがないと前進しないことも沢山ある。例えば、家庭教育であれば、令和２年から徳島県においても、「子育て世代包括支援センター」が開設されている。全ての市町村にあるわけではないが、このような所と連携協力・情報共有しなていかないと実質的成果はあげられないと思う。

馬場委員長　ネットワーク行政の実質化いう問題は非常に難しい。多様な主体が様々な取組を展開しているが、まだまだ行政の役割は大きく、財源の面でも然り。可能なところからネットワークを作っていくことが重要だと痛感している。

では、続いて佐藤委員に意見をお願いしたい。

佐藤委員　今年の４月に起業したが、昨年度末までは31年間の会社勤務をしていた。女性初の事業部門の部長として管理職を経験している。退職の理由は母親の介護のためである。介護をしながら母親の暮らしを見ていて、高齢者の独り暮らしは非常に辛いかもしれないと思うようになった。今後ますます進むであろう高齢社会の課題を解決するには、ICT の活用が有効であると実感し、ICT 教育を推進する事業を立ち上げている。
また、現在「まなびーあ徳島」の方でも講師を務めている。講座ではシニア向けの ZOOM の講習を行っている。ZOOM を通してでも「つながりを持ちたい」という思いを持っている方も多く、手応えを感じている。

例えば、社会の課題として「買い物難民」の問題があるが、ICT が活用できれば、翌日には品物が届く。孤独を感じる時は ZOOM を通して繋がることができるというようにクリアできる課題は多い。私の持つネットワーク等の力、主婦の隙間時間を上手く活用して困難を抱える独り暮らしの高齢者の方々を支援したいと思っている。

馬場委員長　超高齢化社会の中では重要な課題である。今後、いろいろな御意見をお聞かせ願いたい。

では、続いて多喜川委員に意見をお願いしたい。

多喜川委員　私は教員として採用され 35 年間勤務しているが、県で２年、市で２年教育行政に携わり、大学院でも２年間学んだ。残りの 29 年間は小学校の教員としての勤務で、プライベートでは３人の子の父親であり、地域の「おっちゃん」という立場である。 社会教育委員就任にあたり、自身を振り返ってみると、父親の役割、教員としての役割を果たしてきたように思う。社会教育にどのような関わり方をしてきたかを振り返ってみると、例えば、学校行事の中では公民館の方やスポーツ少年団の方に指導いただいたり、地域子ども会の方々と海水浴場で体験活動をしたりという地域で子供の教育活動を支援してきた経験が思い起こされる。最近、よく感じるのは、孤立化した家庭が増えていることや自分の子供には一生懸命になるが地域の子供には厳しい保護者が増えてきたことである。学校の先生への接し方についても「お互い様」といった考え方が薄れてきている。だからこそ、学校と家庭と地域が一緒に活動するような取組が必要だと強く感じている。

特に、学校運営協議会（以下 CS）という概念が出されている今、学校としては諸手を挙げて賛成とは言いにくい。なぜなら、事業は人・金・場所・時間が確保できて成立するものであり、この部分を整えることは非常に難しいからだ。しかし、社会を取り巻く状況を見るに、どこが責任を持って実施するのかと問われれば、学校しかないとも思っている。

例えば公民館をメインの活動場所として事業を行うとして、人が集まるかは非常に難しいところ。やはり、地域の活性化・社会教育の推進という観点からも学校を中心とした取組が必須となるのだろう。県では「徳島ならでは」というテーマを掲げ各種取組を実施しているが、地域の「ならでは」とは一体何だろうかを深く掘り下げる必要がある。前任校では防災教育に注力していた。理由は、地震による津波が 20 分後には 30 ｃｍ、50 分

後には 5.8 mといった規模で到達が予測されている地域であるからだ。このような地理的条件等もあり、以前から、地域も学校も一体となって防災教育に力を注いできた。地域と学校に共通する目的や課題が明確であったことが、地域と学校との連携・協働が進んだ要因だと思う。

今年の春に異動した勤務校は、650 名余りの児童と 50 名の教職員、県南では最も大きな学校である。現在、その校「ならでは」、その地域「ならでは」を掘り起こそうと取り組んでいるところである。また、学校のためにも地域のためにも社会教育委員として尽力したいと思う。

馬場委員長　学校を核とした地域の再構築ということが今めざされているので、学校側としても CS に積極的に取り組んでいただきたい。文科省では、全義務教育学校への配置をめざしているが、CS があろうとなかろうと、地域の方々が関わることで学校の教育の質が上がっていくという方向性をめざしていただきたいと思う。

では、続いて内藤委員に意見をお願いしたい。

内藤委員　私は「子供の読書活動推進委員」への就任がきっかけで生涯学習課と縁ができ、その後「社会教育委員」としても意見を述べてきた。現在は、徳島市の首長であるが、それ以前は、県内外で「まちづくり」「社会課題の解決」に取り組んできた。 先ほど来「連携」というワードが出ているが、各地域で個々それぞれに活動をしているが、それらが有機的につながっていないこと、加えて、課題について自分ごとと捉えていない、当事者意識を持っていない人が多いこと、これら２点を解決しないと徳島の未来は明るくないと思って活動を継続してきた。現在は、徳島市の首長という立場にはなっているが、太田委員や佐藤委員のように当事者意識を持ち事業を推進していきたいと思う方、起業でなくとも NPO や個人事業主であったりとか、多様な関わり方があると思うが、そのような方々が、もっと活動しやすい土壌を作りたいと強く思っている。

例えば、徳島市であれば社会課題を当事者団体と共に解決できるような補助金制度を作っている。また、私自身の過去の経験からも、「話を聴く行政」「話を聴くトップ」をめざし活動をしている。行政が動かねばならない部分もあれば、行政だけではできない部分も非常に大きい。徳島市の予算の９７％は使途が決まっている。残り３％で未来のために何をやっていくか、市民の方々が何を求めているのかを熟考していかなければならない。コロナ禍の影響と相まって少子高齢化も今後ますます進むと想定される。様々な課題を抱えている多様な主体が有機的につながって課題に向き合わないと徳島を変えられないと考えている。だからこそ、社会教育委員の役割は重要だ。２年間委員の皆さんと意見を交換しながら良い方向に進めていければと思っている。

馬場委員長　従来から様々な活動を熱心に続けてきておられる。次の会議では、活動の内容など詳しく教えていただきたい。

では、続いて中坂委員に意見をお願いしたい。

中坂委員　まだ、大学生で知識・経験という点では非常に浅いけれども、常々考えていることがある。きっかけは、サドベリースクールを見学したことにあ

り、そこでは教員と在籍する４歳～１９歳までの子供が同等の立場・権利を有し、協議を重ねながらスクール運営がされている。非常に興味深い体制だと思った。このようなサドベリースクールの方針を社会教育にも取り入れて、徳島の社会教育では幼児から小中高校の児童生徒・高齢者の方も含め一緒に自由な学びができる場の創出ができればと思う。もちろん財源の確保などの課題があるので、廃校や空き家などの空きスペースを有効活用してサードプレイスとしての機能を発揮させる。集まる人々は活動を通じて自己有用感を高めたり、生きがいを感じられたりする取組に繋げられたらと思う。

馬場委員長　若い視点から、施策のヒントをいただいたように思う。どんどん意見をお願いしたい。

では、続いて野中委員に意見をお願いしたい。

野中委員　社会教育に関する活動として、ボランティアを３０年間続けている。活動は世代間交流を主軸に据えて、阿波市を中心に 12 ～ 13 回行ってきた。認定子ども園や小学生等の子供から高齢者まで、幅広い年齢層にイベントに集まってもらうが、近隣の高校の JRC 部にも協力を依頼し、多世代を巻き込む形で何十年もやってきた。我々の活動を次世代にもしっかりと受け継いでもらうことを狙いとしている。また、阿波市の図書館は指定管理制度を導入しているが、私自身、図書館長の経験もあり小中高の学校との関わりもあった。また、読書活動の推進ということで、内藤委員とも一緒に活動をしたこともある。体育館で「読み聞かせ」イベントを実施 2500 名の参加者があった。総合司会を内藤委員に依頼し、読み聞かせのみではなく、遊びのゾーン・ 工作ゾーン 等も設置した大規模イベントを成功させてきた。その後、図書館を退職し現在は公民館で勤めている。私自身が社会教育委員に選任された理由は、経験とリンクした多種多様な意見を述べることにあると思っている。

馬場委員長　是非、新しい意見、多様な切り口で御提案いただきたい。

では、続いて濱田委員に意見をお願いしたい。

濱田委員　私はエンパワーメントな学校を創ろうということを目標に、教師と子供それぞれがファシリテーターとなって学びあい聴き合い高め合うという教育活動を進めつつ、そこに ICT の活用も加え、子供たちが「主体的対話的で深い学び」を獲得できるよう取り組んでいる。学び方を学んだ子供たちが社会に出た時に、本当の社会教育の実現、生きる力につながるのではないかという思いから、子供たちの未来のための教育の実現に向けて教職員とともに進めている。

私が社会教育委員に選任されている理由は「ファシリテーション」に有ると思っている。私の学校経営の中心には 「ファシリテーション」を据えている。「ファシリテーション」の基本は「伝える力」を大切に情報交換間をしながら様々なことを前進させていくことであると思う。

また、もう一つ提案させていただきたい。会議でも何度か発言している「可視化」することについてである。協議中の各委員の意見の相関関係等が可視化される工夫があると良いと思う。

馬場委員長　議事録はあるのだが、意見の共有を可視化する仕組みがあるといいという御意見であった。事務局にはぜひ検討いただきたい。

最後になりますが横田委員に意見をお願いしたい。

横田委員　現在、鳴門市内の高校の学校長を務めている。平成元年の採用以来国語科教員として勤めてきたが、平成 25 年から 5 年間生涯学習課で勤務。馬場馬場委員長はじめ社会教育のスペシャリストの方々にお会いし、その後の教員人生がガラリと変わる経験であったと思っている。徳島には社会教育を推進されておられる本当に素晴らしい地域人材がいらっしゃるのだが、学校教育や児童・生徒たちとの繋がりが比較的薄いのではないかと当時から考えていた。地域人材の活動をまずは知っていただくこと、そして学校教育にそのエッセンスを取り入れることが喫緊の課題であると思い、学校現場では是非とも、それをやってみたいと考えていた。学校現場に戻って以降、各校での教育活動において留意してきたことは社会教育の視点を生徒にどのように持ってもらうか、また、それ以前に教職員に社会教育をどのように認知してもらうかということに心を砕いてきた。先ほど、濱田委員からもファシリテーションについての意見がありましたが、ファシリテーションに関する事例を私の教育活動の経験からも報告させていただきたい。

教頭時代に勤めた学校の生徒が生涯学習課主催のファシリテーター養成講座に参加させていただき、そこでの学びを生かし某国公立大学への進路実現を果たした。学校現場で社会教育の重要性・成果を理解してもらうには進路実績に繋げることだと考えている。成功体験・成果を目の当たりにすることで、生徒や教員の思考の変容をもたらす。社会教育の視点を学校現場にダイレクトに投入していくには、進路実現と結びつけていくのが堅実ではないかと思っている。

また、現在の勤務校では CS が今年度からスタートしている。先ほど来連携というワードが出てきているように、CS の委員から出された意見を繋げるためにも熟議の場を積極的に創出していこうと考えている。

馬場委員長　実践を重視しつつ、社会教育と学校教育の連携に取り組んでいただいていることが分かる。また、大学との連携ということにも挑戦していただきたいと思う。

最後に私からも意見を述べさせていただく。多様な活動が各所で実践されているにも関わらずネットワークが弱い、広がりがみられない等、非常に難しい課題があるが、課題を打破しながら新しい徳島の社会教育の方向性を見いだし、示していくことが我々の課題であると再認識した次第である。是非、皆様の御協力をお願いしたい。それでは終了の時間となったので以上で終了としたい。